



ネコがこんなにかわくなった理由

黒瀬奈緒子 著

2016年10月・PHP研究所発行

定価（本体820円＋税）

評者 酪農学園大学 教授 浅川満彦

日本の飼育統計でネコがイヌを凌駕したことは周知の事実である。大学教育でもこのことを配慮した展開も必要だろうが、「ネコ学」を前面に打ち出した授業は難しい。教員としては自習に耐えられる適切な良書を紹介することが当面の義務であろう。この場合の良書の性質は明確である。まず、この修行を乗り切れるのかどうか、まことに怪しい昨今の学生であるので、最後まで惹き付けるそれなりの面白みがないといけない。だが、あまり長くても危険。次いで、当然ながら、価格的にも十分考慮されるべきである。さらに、その内容は最新かつ信頼すべきものであること。これが最後に来ていることが情けないが、数多学生さんと接した結果の序列である。さて、本書はそのような条件を満たすであろうか。

まず、新書であり量的・価格的な面は余裕でクリアした。著者はネコ科ではなくイタチ科動物の分子系統と保全生物学を専らとされるが、優秀な研究者の常として、専門誌に掲載された文献準拠（文献一覧も付随）で筆を進めていることから（220頁）、科学的に信頼すべき内容となると期待された。本文は以下の章題（括弧内に概要）で構成されていた。

「ネコが来た道」（祖先リビヤヤマネコが家畜化された理由と歴史的な過程，日本を含め世界各地の品種由来）

「ネコ科はどう生まれたか」（分類学と分子系統学の概説，哺乳類および食肉目の系統から眺めたネコ科の分化）

「ネコはどう生まれたか」（ネコ科各属の進化と生物地理，代表的

な種の形態と生態)

「ネコが繁栄した理由」(犬やフェレットなど他飼育動物との比較,  
猫が好まれる理由を生態および行動学的な視点から解説)

「ヒトがつくるネコの話」(品種の特に被毛に関する遺伝的背景)

「ネコとヒト,その関係とこれから」(保全施策の試み,感染症など)

まず,モデル・コア・カリキュラムで義務づけられた獣医野生動物学を講ずる身としての感想。老境に入りつつあり,哺乳類(特に,アフリカ獣類,異節類および北方獣類<真主齧類・ローラシア獣類>の真獣類)の分子系統(さらに,これにより生じた新規タクサ名称)に大きな変化を遂げていることを知りながら,「まあいいや」と逃げ回っていた。されど,第2章では,図らずも哺乳類全体の系統進化に関する最新知見を見渡せた。分子系統学の気鋭の多くは,こういった一般書をあまりお書きにならないようなので,僥倖であった。ちなみに,主役のネコおよびネコ科は他の食肉目や鯨偶蹄目などとともローラシア獣類にくくられるので,このグループに,若干,軸足を置きつつ詳述された。

第3章以降は,ネコ(類)に関しての最新文献情報により,新たな事実がダイナミックな筆致で紹介され,最後まで読者の心を掴んでしまう。たとえば,ライオンとジャガー,チーターとピューマなど新旧大陸の組合せが,系統的にもっとも近いという意外な事実は目を奪われた(97頁)。もちろん,冒頭危惧された学生云々はまず杞憂。なお,伴侶動物医療に携わる獣医師各位にとっても,しばらく続く「ネコノミクス」(3頁)の潮流を巧みに乗り切るために,是非とも,ご一読いただきたい。ネコの感染症(病原体)としては,トキソプラズマとFIV・FeLVによる感染症が記述されていたが(178~181頁),ライオンやトラなどの「ヒョウ系統」の一部で認められたジステンパーは追記される必要があったかも知れない。最近,動物園飼育個体あるいは野生個体群の健康管理上,注目された事実であったので。しかし,このような感染症に関しては,(残念ながら)ますます増え,かつ,変化していくのであろうから,次の改訂版で取り纏めることで良いとも感じた。